

【旧約聖書日課】創世記 12章1～9節

<sup>1</sup>主はアブラムに言われた。

「あなたは生まれ故郷

父の家を離れて

わたしが示す地に行きなさい。

<sup>2</sup>わたしはあなたを大いなる国民にし

あなたを祝福し、あなたの名を高める

祝福の源となるように。

<sup>3</sup>あなたを祝福する人をわたしは祝福し

あなたを呪う者をわたしは呪う。

地上の氏族はすべて

あなたによって祝福に入る。」

<sup>4</sup>アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。

アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。<sup>5</sup>アブラムは妻のサライ、甥のロトを連れ、蓄えた財産をすべて携え、ハランで加わった人々と共にカナン地方へ向かって出発し、カナン地方に入った。<sup>6</sup>アブラムはその地を通り、シケムの聖所、モレの樫の木まで来た。当時、その地方にはカナン人が住んでいた。

<sup>7</sup>主はアブラムに現れて、言われた。

「あなたの子孫にこの土地を与える。」

アブラムは、彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた。

<sup>8</sup>アブラムは、そこからベテルの東の山へ移り、西にベテル、東にアイを望む所に天幕を張って、そこにも主のために祭壇を築き、主の御名を呼んだ。<sup>9</sup>アブラムは更に旅を続け、ネゲブ地方へ移った。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 4章13～25節

<sup>13</sup>神はアブラムやその子孫に世界を受け継がせることを約束されたが、その約束は、律法に基づいてではなく、信仰による義に基づいてなされたのです。<sup>14</sup>律法に頼る者が世界を受け継ぐのであれば、信仰はもはや無意味であり、約束は廃止されたこととなります。

<sup>15</sup>実に、律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違犯もありません。<sup>16</sup>従って、信仰によってこそ世界を受け継ぐ者となるのです。恵みによって、アブラムのすべての子孫、つまり、単に律法に頼る者だけでなく、彼の信仰に従う者も、確実に約束にあずかれるのです。彼はわたしたちすべての父です。<sup>17</sup>「わたしはあなたを多くの民の父と定めた」と書いてあるとおりです。死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる神を、アブラムは信じ、その御前でわたしたちの父となったのです。<sup>18</sup>彼は希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じ、「あなたの子孫はこうになる」と言われていたとおりに、多くの民の父となりました。<sup>19</sup>そのころ彼は、およそ百歳になっていて、既に自分の体が衰えており、そして妻サラの体も子を宿せないと知りながらも、その信仰が弱まりはしませんでした。<sup>20</sup>彼は不信仰に陥って神の約束を疑うようなことはなく、むしろ信仰によって強められ、神を賛美しました。<sup>21</sup>神は約束したことを実現させる力も、お持ちの方だと、確信していたのです。<sup>22</sup>だからまた、それが彼の義と認められたわけです。<sup>23</sup>しかし、「それが彼の義と認められた」という言葉は、アブラムのためだけに記されているのではなく、<sup>24</sup>わたしたちのためにも記されているのです。わたしたちの主イエスを死者の中から復活させた方を信じれば、わたしたちも義と認められます。<sup>25</sup>イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。

## 新しい旅立ちへの招き

教会暦の一つの伝統では、今日から三週の主日を「終末三主日」と位置づけてきました。「終末」などと言うと、少し物騒に思われる方もあるかも知れません。わたしが神学校に進み、牧師として歩み始めたのは、ちょうど二十世紀が終わる頃でしたが、すでに子どものころから「世紀末もの」が流行っていたことを思い出します。まるで世の終わりが来るような触れ込みで「世紀末」が語られ、予言が語られていました。オカルト的なテレビ番組なども多かったので、知らず知らずのうちに恐怖心を植え付けられていた人も多かったのでしょう。「新々宗教」と呼ばれる宗教団体が次々に生まれて、若い人たちが取り込まれていっていました。意外に思われるかもしれませんが、その頃には、青年たちが多く集まる教会も少なくなかったのです。わたし自身も、そのような教会の中で青年時代を過ごしました。ところが、世紀末が終わり、新しい世紀に入るや否や、青年世代は潮が引くように教会で姿が見られなくなってしまったのです。

もちろん、教会が暦の中で「終末」を語るのは、恐怖心を煽って教会に人を呼び戻そうという魂胆があるからではありません。けれども、「終末」ということを考えるのは、わたしたち人間にとって、宗教云々にかかわらず、自分自身を振り返り、生きていく上での土台になることを確かめようとする上で、大切な意味のあることなのでしょう。そして、そのような営みは、生き方を変えたり、新しいところへと一歩踏み出していくことへと、わたしたちを押し出していく原動力にもなるのだらうと思うのです。

教会に、わたしたちは、多くの人を招きたいと願っています。わたしたちの教会では、来週には「オープンチャーチ」を開き、午後には地元の音楽家を招いてのコンサートも企画しています。イベントに関心を持ってもらって、まずは一歩、教会の中に入ってもらうことで、教会に親しみを持っていただきたいと願っています。過去の「オープンチャーチ」では、大勢の方が来会してくださいました。「オープンチャーチ」に来会くださったことをきっかけに、その後続けて教会においでくださるようになった方もあります。

もっとも、「敷居が高い」と言われる教会が、自ら「オープン」な姿勢を示すことは、いまやどの教会にも求められていることです。「オープンチャーチ」のときだけ「オープン」にすればよい、ということではないでしょう。「教会はいつもオープンです。扉を開き、心を開き、真心をもって、どなたのことも歓迎します」という日頃の姿勢を、「オープンチャーチ」の機会に多くの方に知ってもらおうというのが、本当のところです。

そのようにして、教会が親しみやすいところだと受けとめてくださる方が、一人でも増えればと願います。けれども、わたしたちの願いは、そこで終わりではありません。わたしたちは、ただ仲間を増やしたいだけではありません。わたしたちは、その人たちに、新しい生き方を始めてもらいたいのです。新しい旅を始めたいのです。神を知り、神の言葉を聞き、神の示す道を尋ね求めて行く、新しい旅立ちに、お招きしたいのです。

## 祝福の源となる

旧約聖書日課（創世記 12 章）は、まさにそのような新しい旅立ちへの招きの物語です。「聖書」の最初の書である「創世記」は、長いイントロダクションを終えると、一人の人に焦点を当てて物語り始めます。「アブラム」という人、後に「アブラハム」と神から新しい名を与えられる人の物語です。「聖書」にあまり親しんでいない方があるならば、わたしは、まず、ここから始まる「アブラハムの物語」をお読みすることをお勧めします。「創世記」は、ここから、アブラハム夫妻に始まる四世代の家族の物語を終わりの章まで続けます。そこには、「聖書」が考える「信仰」とは何なのかという問いと答えが、繰り返し物語られているのです。

このアブラハムは、しばしば「信仰の父」と呼ばれる人物です。キリスト教だけでなく、ユダヤ教でもイスラム教でも「信仰の父」に位置づけられています。それぞれの宗教の違いは、「だれがアブラハムの信仰を受け継ぐ子か」という点に関する見解の相違にあるのです。とは言え、実際に「創世記」を読み進めて見るならば、「信仰の父」と呼ばれるアブラハムが、立派で敬虔な信仰者であるとか、ときに殉教も厭わない熱烈な信仰の持ち主であるとか、そういうものではないということが分かるはずです。アブラハムに対するそういう通念は広く流布していますが、「創世記」自体がそのように物語っているということはありません。そうだとすると、アブラハムはなお「信仰の父」と呼ぶことができるのでしょう。

「聖書」に描かれるアブラハムは、どちらかという自分の実業家・戦略家としての能力を頼りにして、普段はあまり神の言葉に熱心に耳を傾けているとは思えない人物です。ただ、自分の判断がいつも事をうまく運ばせることになるとは限りません。アブラハムも、ときに事態が混迷してしまう経験をするのですが、そうすると不思議と周囲の何者かを通して、神の前へと導かれていくことになるのです。そのようなことが何度でも繰り返されるのです。しかし、「聖書」は、そのような彼の人生を、神に呼ばれ、神の言葉に従って歩んだ「信仰」の旅路だったと、わたしたちに物語ります。

もちろん、アブラハムには、そのような人生の旅路へと舵を切った、大きな転機があったのです。それが、今日の日課箇所でも描かれていることです。75 歳の転機です。アブラハムの生涯は 175 年だったとされていますが、75 歳はすでに十分高齢です。このときまで、アブラハムは、父の家に留まっていました。すでに結婚をしていましたが、父が健在の間は、父のもとにいたのです。ところが、その父が死んだとき、アブラハムは、その家を出たのです。父の家には、他の兄弟が残ったからです。そうせざるを得なかったのでしょう。そのような家庭の事情は、アブラハムだけのものではなかったでしょう。ただ、アブラハムは、そのとき、確かに、人生の転機を迎えたのです。新しい旅を始める機会を得たのです。「わたしが示す地に行きなさい」と呼びかける神を知り、その道を尋ね求め始めたのです。

それは、彼が「**祝福の源となる**」道であったと、聖書は告げています。

## 「世界」を受け継ぐ

教会へと集められて来られた皆さんが、ここにおいでになられたきっかけは、さまざまでしょう。アブラハムのように、父親や家族、親しい者の死がきっかけとなって教会に来られるようになる方もあります。確かに、教会でご家族の葬儀を執り行われたことがきっかけで、その後、礼拝においでになられるようになる方は、少なくありません。

けれども、きっかけは、人それぞれです。アブラハムの物語も、本当のことを言えば、「聖書」は、父の死がアブラハムの転機になったとはっきり描いているわけではありません。そのことを示唆しているだけです。それは、きっと、アブラハムという人の立場に立って考えてみても、「自分にとっては、あの出来事が人生の転機だった」と後になって振り返ってみて初めて思い当たることだからなのだろうと思います。

それでも、転機は転機です。アブラハムは、そのとき、神の呼びかけを知るようになり、神の「**行きなさい**」という言葉を頼りに、「祝福の源となる」という生き方を始めたのです。「地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る」という途方もない計画の一端を担う、生涯をかけても果たしきれない使命の旅路を、自らの人生に定め始めたのです。過去がどうであろうと、またその後には紆余曲折はあったとしても、アブラハムは、そのときから、その旅を始めたのです。

使徒書日課（ローマ4章）で使徒パウロは、そのアブラハムが先んじて歩んだ旅路を、「**世界を受け継がせること**」と言っています。もちろん、パウロは、自分たち教会が「世界を征服する」というようなことを言いたいのではないでしょう。けれども、パウロは見据えているのです、神がアブラハムのときからずっと人間に呼びかけては担わそうとしているのは、いわば「世界祝福計画」なのだ、ということ。

神は、世界を祝福されることを願われているのです。「創世記」は、最初に天地創造の由来を描く中で繰り返し、「神はそれらのものを祝福された」「それは極めて良かった」と告げています。しかし、現実の世界は、どうでしょうか。わたしたちの知っている世界、わたしたちの生きる現実の世界は、とても「祝福された良いもの」とは思えないものを、数限りなく含んでいます。それでも、使徒は言うのです、「神は、あなたがたに、この世界を受け継がせようとされている」と。使徒は、知っているのです、主イエスの願いを。そうです、主は言われました。「この世界をあきらめるな、この世界から遠ざかるな、むしろ、この世界の中にこそ、あなたがたは出て行きなさい。そこで、この世界を祝福しなさい。世界のあらゆるものを、あなたがたは受け入れて、祝福を祈りなさい。祝福された者になるように祈りなさい」と。

今日の午後、皇居周辺で行われるパレードに対しても、わたしたちは祝福を祈ってよい。あの方々が、そして、そこに集まり、そこに目を向けるすべての人々が、神の祝福にふさわしい者へと新たにされ、造りかえられ、共に祝福にあずかる者とされるようにと祈る。それこそが「アブラハムの子ら」の祈りなのです。